絵本フォーラム

2018年7月10日　第119号
[illegible]

発行所　NPO法人「絵本で子育て」センター
芦屋　〒659-0067　芦屋市茶屋之町2-21-405
TEL 0797-38-7516 FAX 0797-38-7939
https://www.ehondekosodate.com/　E-mail info@ehondekosodate.com
郵便振替口座 00900-8-191667

ⓒNPO法人「絵本で子育て」センター2018

咲きはじめた朝顔が、夏のはじまりをおしえてくれます。

イラスト・文　たききょうこ

子ども最前線

親子でお世話になった絵本

倉田　展世

梅雨明けを間近に控え、もうすぐ夏がやってきますね。夏休みが始まる前のわくわく感は今の子どもたちにも共通しているのでしょうか？　親子でいろいろな体験ができる機会も増えますね。

子どもたちが小学生だった頃、親子でお料理教室体験に行ったことがあります。皮から作る手作り餃子を作り美味しかった記憶がよみがえります。もうすぐ二十歳を迎える次男は調理師めざして専門学校で勉強中です。その息子に料理指導を受けることがあります。一応二十数年、台所を預かってきたプライドからか素直に聞けないこともあります。「そんなこといったってさぁ」「理想はそうだろうけどさぁ」と、ついつい言い訳をしたくなります。素直に聞き入れるということの難しさ、体験させてもらいました。いらぬプライドからなのか上からの態度をとってしまい、頭が固いなぁ、意固地なおばさんになってるわ……と反省しきりです。子どもが小さかった頃、頭ごなしに子どもの言い訳を否定したことのある私。認めてあげられるだけの心のゆとりがあればなぁ、と後悔するこの頃です。

そんな子どもたちと読んだ絵本の中に、先日逝去されたかこさとし氏の絵本『からすのパンやさん』（偕成社）があります。私も子どもの頃大好きだったこの絵本。当時は美味しそうなパンがいっぱい出てきて、森の中にあるパンやさんを想像するのが楽しかったように思います。大人になってまたこの絵本に出会い子どもと一緒に読んでみると、かこさんのユーモアのあるお話がおもしろく、何より出てくるからすの親子はどんな状況になっても楽しく暮らします。そう、こげたパンだって美味しいおやつになってしまうのです。出てくるお友だちや大人のからすたちも皆やさしくて、あたたかい雰囲気も含めてこの絵本が好きだったのかもしれない、と再認識しました。のびのびと成長するからすの子どもたち。どんな私でも受け入れてもらえる……と無意識に感じられたのかもしれません。

『からすのパンやさん』（偕成社）

情報があふれる中、自分が子ども時代には気にもしなかったことに気を配り、ちょっと不安になりながら子育てをする。いつの時代でも自分が子どもの時と変わらない状況だということはないのだから、その時代に合わせて考え判断することは常に必要で、難しいとも思います。でも、時代の流れの中で変わらず存在してくれるものもあります。親子でお世話になり楽しかった子ども時代を共有できる絵本もその一つだと思います。この世にたくさんの絵本を送り出してくれた作者の方々に感謝です。「ゆるしてください」こんなにも心に突き刺さるかなしい言葉を子どもにいわせないためにも……。

（くらた・のぶよ）

“たましい”をゆさぶる子どもの本の世界 108

飫肥　糺（批評家・エッセイスト）

文は人なり
読み続けられる作品の
文章表現が表出する
『ふしぎなたいこ』（岩波書店）

文は人なり……という。『大辞泉』によれば、この格言は文章を見れば書き手の人となりがわかるという意で、18世紀フランスの博物学者ビュフォンの言葉をフランス語から意訳したものだ。ビュフォンはアカデミーフランセーズ会員となった1753年、「文体論」と題した入会演説のなかでこの名言を発している。「文」はフランス語で「style」と語られているから、格言にいう「文」は「文体」（文章表現のスタイル）と、ぼくは理解する。

ともかくも書き綴られる文章表現（文体）は書き手の考え方や生き方、その人柄に至る書き手そのものを表出するのだという。万人をなるほどと肯かせるビュフォンの名言は265年を経た今日でも明解に活きているといえるのではないだろうか。かくして、作家たちはそれぞれ特長のある表現スタイル（文体）で独自の作品世界を創造し、かれら自身の人となりをもあらわにする。

終戦前後から20世紀いっぱい、読書普及から創作・翻訳活動まで、絵本や児童文学の普及に大きく尽力したことで知られる作家の石井桃子。彼女の人となりは作品からうかがい知ることができるのだろうか。

小さな絵本選集『ふしぎなたいこ』は日本の昔話を絵童話化した作品で、タイトル作品のほか「かえるのえんそく」「にげたにおうさん」2作を収録、いずれも清水崑が絵を担当する。

「ふしぎなたいこ」は、類似の話が各地に伝わる昔話「源五郎の天昇り」をモチーフとした物語。主人公げんごろうが持つふしぎな太鼓は、「鼻高くなれ」といいながら片方をたたくと高くなり、「鼻低くなれ」と反対側をたたくと低くなる。

しかし、人々を喜ばせるためだけにしか使えない太鼓を、好奇心にかられたげんごろうが、人間の鼻はどのくらいのびるものかと自分の鼻に「鼻高くなれ」とやったから、さあたいへん……。ばち（罰）があたって天国までいくはめになり、ついには天国からまっさかさまに琵琶湖に落ちてげんごろうブナになってしまうというお笑い話である。

石井桃子の物語は明解であり文章は明快である。やさしい、品性ゆたかな言葉づかいも美しい。子どもたちに深い愛情と関心を持ちつづけたにちがいない石井は、聞き手となる子どもたちがひとたび聞いたり読んだりすれば、すぅーと脳裏に刻めるようなわかりやすいテキストづくりに推敲を何度も重ねたに違いない。また、笑い話に必須のあかるく心地よいテキストは面白さを存分に引き出しているではないか。

なんともいえぬユーモアに笑いをさそう清水崑の絵もすっかりテキストと気持ちよくなじんですばらしい。人気絶大であった清水崑の起用を自ら願い出て実現し、ふたりでコラボする絵と文の合同と分担をしっかり議論を交わして進めたという創作態度を知るにおよんで、ぼくは、石井桃子の人となりを勝手に推し量っている。

絵本選集『ふしぎなたいこ』の初版発行は1953年、65年も読み継がれる作品の文章表現は、やはり、「文は人なり」なのだろう。

（おび・ただす）

『ふしぎなたいこ』石井桃子＝ぶん　清水崑＝え　岩波書店

ジェリー・マーティン　英訳
えいごのじかん2　全6巻
分売可　各巻定価（本体1,800円＋税）
[illegible]
すずき出版　[illegible]

おじいちゃん
梅田俊作・梅田佳子　作・絵
死ぬってどういうこと？
おじいちゃんが死んだ。家の中でも、家の外でも、おじいちゃんをこんなに近く強く感じるのに、もういないの？　男の子が思い出の場所までたどりついた時、奇跡が――。大好きな人の死を男の子が受けとめ、前を向いて歩みだすまでを描いた絵本。
ポプラ社
〒160-8565東京都新宿区大京町22-1
TEL03(3357)2212 FAX03(3359)2359

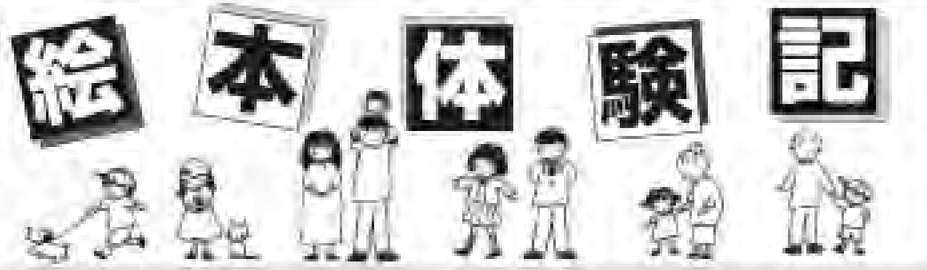
リトル・ピープル、ビッグ・ドリーム
フリーダ・カーロ
はげしい苦痛に耐えて自分を描きつづけた情熱の画家の生涯。
I・S・ヴェガラ＝文　アン・ゾーネ＝絵　おびただす＝やく
定価：本体1,400円＋税
ISBN978-4-89737-882-4
六耀社　〒135-0052　[illegible]
www.rikuyosha.co.jp

抱きしめてあげて
育てなおしの心育て
渡辺久子 編　いわさきちひろ 画
定価 本体1,400円＋税
[illegible]
太陽出版　[illegible]

シリーズ8年ぶりの新刊！
くろくんとちいさいしろくん
なかや みわ さく・え　定価 本体1,200円＋税
くろくんたちは、迷子になったしろくんに出会います。でも、しろくんの家族が見つかりません。親切にしてくれたくろくんたちへ、しろくんは画用紙に何かをかいていきました。紙の裏を見ると、そこに浮かび上がったのは……！
童心社　[illegible]

現代の子育て環境105

わたしの絵本体験記



原稿募集

絵本フォーラムでは、次の原稿を募集しています。
・わたしの絵本体験記
子育ての中で体験した絵本のエピソード、読み聞かせで感じたこと、伝えたいこと
800字程度にまとめて、[illegible]
絵本フォーラム編集室

絵本は子育ての強い味方

岸　春江（北海道札幌市）

現在9歳（小4）の娘がいます。私が子育てで一番悩んだのは1歳で断乳した後の「寝かしつけ」でした。当時「早寝早起き朝ごはん」が盛んに提唱され、それに賛同していた自分がいた半面、はじめての「早寝」でつまずく母親だったのです。

夜になっても寝てくれない娘。私はまるでダメ母のレッテルを貼られているかのような気がして焦り、毎晩泣きました。

そんな時、出会った絵本が『おやすみなさいコッコさん』（片山健／さく・え、福音館書店）です。夜になっても〈ねむらないもん〉と意地を張るコッコさん。その姿が我が娘と重なり、「もっと起きている時間を楽しみたい」と言わんばかりの姿に愛おしさを感じました。

早速買って帰り、ベッドで読み聞かせスタートです。私は娘が「おんなじ、おんなじ！」と喜んでくれると思って読みました。ところが、彼女の反応は違いました。どうだったと思いますか？　読み終わるころには「スーッ」と寝息をたてていたのです。「まだ寝たくない」。そんな気持ちを代弁してくれたコッコさんに共感して安心感が得られたのかもしれません。

それからというもの、この絵本は寝かしつけの時には欠かせない大事な一冊となりました。絵本は子どものためのものだと思っていた私。しかし、こうして、子育てを助けてくれる魔法の一冊にもなる事を知りました。娘への絵本の読み聞かせは、現在も実践中です。赤ちゃんの時とは違った反応を楽しみながら、今でも親子でくつろぐ大切な時間となっています。

（きし・はるえ）

絵本は生活に欠かせない

木村　友香（埼玉県さいたま市）

私が絵本と真剣に向き合おうと思ったのは、息子がお腹の中にいる時です。学生時代には保育士や幼稚園教諭を目指して学んでいたので学習の一環として絵本に目を向けることもありましたが、私には課題の一つでしかありませんでした。

そんな私が絵本と向き合うきっかけは、出産のために仕事を休むこととなり毎日をどう過ごすか考えたからです。

そして「読み聞かせなら子どもが生まれる前からできる」と絵本を200冊ほどまとめて購入したのです。今思えばとても大胆なことだったのですが、この絵本たちが私たち親子の愛の架け橋となってくれました。

息子は妊娠中はもちろん、生まれてからも読み聞かせにとても反応してくれて、それが嬉しく毎日続けました。息子は今5歳、2歳の娘と夫と今では4人で絵本を読むのが日課となっています。ホットケーキを一緒に作るときには、何度も読んで覚えた「しろくまちゃんのほっとけーき」の真似をして「ぽたあん、どろどろ、ぴちぴちぴち……」というフレーズを唱います。

また、公園でブランコにのるときは「10まで数えたらお友だちに貸してあげるんだ」と絵本の真似をします。絵本は生活に欠かせない存在となっています。

そして何より絵本のある生活は、子どもたちに言葉では伝えられない愛情表現ができるのではないかと思っています。親子で過ごす大切な時間、絵本を架け橋にすることで、その時間はかけがえのないものとなるでしょう。

（きむら・ゆか）

息子の反応に絵本の楽しみ方が変化

佐々木　美和（東京都清瀬市）

絵本は妊娠中からたくさん用意していました。でも、息子はあまり反応もしないし、何となく気恥ずかしい思いもあって読み聞かせをしないまま過ごしていました。同じ地域に住む、生後2〜3ヵ月の第1子を持つママたちの出会いの場である「新米ママの会」に参加した時のことです。産後ドゥーラの方が絵本の読み聞かせをしてくださいました。すると総勢12名の赤ちゃんが絵本に注目し始めたのです。息子は興味ないだろうな、と膝上を見るとなんと絵本をじっと見ているではありませんか！　もちろん読み聞かせが上手だったこともありますが、赤ちゃんも大人のようにその場の雰囲気に影響されるんだと実感しました。

家に帰って早速絵本を取り出すと昨日までの興味のなさがウソのよう。「早く読んで！」というように目を輝かせていました。「新米ママの会」に参加していなかったら絵本の読み聞かせを諦めてしまっていたと思います。

まだ3か月なので、ストーリー性のある絵本には飽きてしまいますが、擬音を駆使した絵本、色のコントラストが特徴的な絵本、手遊びを一緒に出来る絵本、などたくさんの絵本を楽しむことが出来ています。息子が生まれる前は「ストーリーもなくつまらない」と思っていた絵本でも、息子の反応を見ながらだと楽しみ方も変わってきます。また、ページ毎のキレイなイラストを見るだけで心が躍ります。今後も、たくさんの絵本を読んで息子の世界観を広げてあげたいと思っています。

（ささき・みわ）

絵本講師の発言席

さあ、山に登ろう！　そして挨拶をしよう！

渡辺　敏子（絵本講師）

2年前のことです。主人が「富士山に登る！」と、そのトレーニングのために金剛山に登り始めました。最初、私は主人のお付き合いで登っていました。ところが登り始めると、四季折々の美しい山の姿、心地よい風、楽しげな小鳥のさえずり、きらきらと揺れる木漏れ日、時にはリスなどの小動物との出会いに私の心が躍るようになったのです。また、山頂では登る度に判子を押してくれます。子どもの頃のラジオ体操を思い出し、その数が増えていくのが何だか懐かしく嬉しく、いつの間にか一人でも登るようになりました。

山ではすれ違う時に「おはようございます」と皆さんが挨拶を交わします。もちろん初めて出会う人とでも。私はこの挨拶が大好きです。挨拶を交わすことで人と人との距離がぐっと縮まるような気がしています。初めてお会いした方からも花の名前を教えていただいたり、何度か挨拶を交わしているうちに、「今日は一人？」「久しぶりやね、忙しかったの？」などと声をかけていただいたりします。そんなお喋りもまた楽しいものです。

しかし日常生活の中では、知らない人同士が挨拶を交わすことはあまりありません。それどころか悲しい事件が起こり、子ども達には知っている人にも近づかないようにと教えなければならないというようなことも聞きます。とても寂しいことだと感じています。

山に登らない私の母は「一人で登って大丈夫なの？」といつも何かあった時のことを心配しています。山にも危険はありますが、私は大丈夫だと思っています。それは何も起きないという自信ではありません。山に登る時、どんなに慣れた道でも緊張感はあります。しかし何かあってもきっと誰かが助けてくれると信じられるのです。そう、山には“挨拶”があるからです。自然の中で人と人とが優しく心地よく繋がっている感覚が持てるのです。

そこで思うのです。今、子ども達は困った時には誰かが助けてくれるという感覚を持っているのだろうか？　私たち大人はそんな世界を子ども達に見せているのだろうか？　しかし実際に事件が起きる中、何を信じ、どう守るのか。答えは見つかりません。このままでは不安が心にどんどん広がっていきます。

人の心は対になって成長していくそうです。不安ばかりを感じていては、心は成長できません。人が心の成長を止めてしまったら、世界はどうなっていくのでしょう。悲しい事件が増えていくのではないでしょうか。どこかで安心を欲している私です。

読み聴かせは、読み手と聴き手の豊かな繋がりの中で、心を揺さぶることが出来ます。“怒り、不安、恐怖”など不快な感情と、“喜び、安心、愛情”などの快い感情の間を、守られた世界の中で自由に行きつ戻りつすることが出来るのです。心を育てることが出来るのです。だからこそ、私は絵本を読みます。一人でも多くの方と共に心を育て合いたいと願うのです。

“一隅を照らす”。私の好きな言葉の一つです。世界中を照らすほどの力は私にはありません。でも、私のいる場所なら照らすことができると思うのです。照らしたいのです。そして私もたくさんの人に照らしていただいているからこそ生かされている。この確かさが、感謝と安心に繋がっていきます。恐れや不安で自分を見失ってしまい、ひとりぼっちと感じることもありますが、人と人とが繋がっている感覚、これを呼び覚ましてくれるものが、山にも読み聴かせにもあると私は感じています。

金剛山には1万5000回以上も登られている方がいらっしゃいます。皆さんもご一緒にいかがですか？　もちろん、読み聴かせもね！

（わたなべ・としこ）

日本図書館協会選定図書　「絵本講師・養成講座」専任講師　藤井勇市／著
子どもに絵本を届ける大人の心構え
定価（税込）一〇八〇円
待望の講演録！
「絵本」とは、人間と人間を繋ぐものです
絵本とは、いわゆる本の形をしたものだけをいうのではありません。育った村の風のそよぎ、木々のゆらぎ、雲の流れ、おばあちゃんのあたたかなお話、おふくろの忙しく立ち働く姿、それらすべてが私にとっての絵本です。そういうものが人間と人間をつなぐ「絵本」ではないでしょうか。そういうたくさんのものを心と身体全体で吸収して、子どもたちが本当の意味での「大人」に育っていくのです。（本文より）
目次より（抜粋）
■子どもたちに絵本を届けたいと思う人とともに考えたいこと
・中川正文先生の思い出・現代日本の情報空間―マスメディアの問題・三つの「ない」社会で生きる子どもたち・「早期教育」の大きな過ち・子ども（たち）に絵本を届ける大人の考え方
■団塊おじさんが子育て世代に小声で伝えておきたいこと
・こころのなかに流れる「物語」・大人としての自分自身を見つめる　その他
■2011年3・11以後―日々断簡
・自然災害が「人災」になるとき・ほんとうの「ゆたかさ」を求めて　その他
絶賛発売中
ISBN978-4-903607-14-6 C0037
NPO法人「絵本で子育て」センター
〒659-0067 芦屋市茶屋之町2-21-405　TEL.0797-38-7516　FAX.0797-38-7939

子育ての現場から 5

凸凹子育て　二つの味方

高梨　香寿子

　母親業をスタートして17年、ヨチヨチ歩きの赤ちゃんだった我が子は、今やコミックとスマホを手放せない今どきの高校生になりました。こう書くと、あっという間の日々だったように見えますが、果たしてその実態は？

　子どもの成長を通して多くの喜びも味わってきた私ですが、一方で、我が子から投げられるボールの多くが「万年反抗期？」と言えるほど思わぬタイミングであさっての方向から飛んできたため、迷子ならず迷母（？）になった回数も数知れず。また、大らかな母をめざしたはずなのに、つい感情的な親子バトルをして「又やってしまった。トホホ」と凹んだ日々もしかりです。

　こんな凸凹子育てを曲がりなりにも乗り切ってこられたのは、陰ひなた大小の助けのおかげ。中でも、「二つの子育ての味方」に細く長く力を貸してもらえたことは幸いでした。

　一つ目は「家庭の外の味方」、ファミサポでお世話になった家族です。ファミサポとは、近隣の有償ボランティア会員に子どもを預かってもらう子育て援助活動支援事業（窓口は自治体のファミリー・サポート・センター）の通称。15年前、近所に知り合いもいない上、いわゆるワンオペ育児に近かった我が家では、困った時のお助けマン的に約4年間利用しました。2歳児を預ける当初の不安は、引き合わせてもらった家族（高校生のいる三世代家族）のアットホームな対応や、雑談からもらった安心感や子育てのヒントのおかげで、たちまち杞憂と化しました。さらに「近所にSOSできる味方がいる」と思えた心の余裕など、日常生活への効果も計り知れません。

　もう一つは「家庭内での味方」、親子の絵本タイムです。私の場合は、出産前に「体力も技術も無い私が、好きな絵本に自分の声を添えるだけで楽しい世界に行ける！」と、手元にあった絵本を楽しんだ延長で出産後にも自然に継続。心身の余裕がない当時「今日一日、誰とも話してないなぁ」と思うことも多かった日々。絵本を通して聞こえる穏やかな自分の声にホッとしたり、長い夜泣きに成すすべもなく母子双方が疲れきった時に絵本を読むといつしか赤ん坊も泣き止んだり……といった一石二鳥の効果もありました。

　一歳を過ぎると、いよいよ我が子の絵本ブームが到来し喜んだのもつかの間、今度は予想を上回る「読んで！」コールに親がギブアップしたり、自分が蒔いた種が育ったにもかかわらず、つい「しまった！」と思った笑い話も。小学生になると回数は激減したものの、思いがけず学校での心配ごとをポロっと吐き出す機会になるなど「なかなか弱音を言えない多感な時期でも、幼い頃から自然と重ねたコミュニケーションタイム（絵本タイム）ゆえ、ふと無防備になれたんかも」と、細く長く続けていたことに母としてホッとしたこともありました。また好きな絵本作家さん自身の迷える子育て経験を知り、同志を得たようで嬉しかったことも……。

　こうして見ると、わが家の絵本タイムは、子どもとの楽しいコミュニケーションタイムであり、そしてそれ以上に私自身の子育ての味方だったのだと断言できます。

　さて、時は流れて元ファミサポ家庭のお子さん（当時高校生）に赤ちゃんが誕生しました。現在高校生の我が子は「かわいい！」を連発。一方私は、元ファミサポさんにお孫さん向けの絵本をプレゼントし、幸せな自己満足をしています。15年の歴史の重みと不思議を感じながら……。

　きっとこれからも「二つの子育ての味方」を心の中に感じながら、まだまだ私は新米の母を更新していく気がします。

（たかなし・かずこ）

ジェリーの ⑤ 日本見聞録

JERRY MARTIN'S JAPANESE MEMOIRS

会いたかった

　私は本を読み終わったら必ず3つの事をします。1つ目はその本を私のお気に入りの本の仲間にするかしないかを決めます。私の家には本棚が4つしかないので本が住めるスペースが限られているのです。なのであまりピンとこなかった本は売るための箱に入れて、その箱がいっぱいになったら売りに行きます。仲間入り決定後は2つ目、その本の1番好きなところをもう一度サラッと読み返し、そこにしるしをつけます。絵本ならもう一度読みます。3つ目はその作家について調べます。作家のことを調べるとたくさんの新しい発見があります。この3つ目はできるだけ本を読む前にしないことにしています。

　自分の本棚に住んでいる本を私は仲間だと思っています。また会いたくなると、その好きなところを読みます。その本を読むとその作家の語りを聞いている気分になります。みなさんは好きな作家に実際に会って話してみたいと思った事はありませんか？　私はあります！　生きている方なら可能性はありますが、残念ながら旅立った方なら無理ですが……もし3回だけ使えるタイムマシンがあったら、会いたい作家さんは誰ですか？　本棚を見ながら考えると会ってみたい作家さんはたくさんいますが、3人だけならこの3人にします。

　第3位は住井すゑです。「え？だれ？」と思っている人もいるかもしれません。彼女はエッセイやさまざまな作品を書きましたが、住井すゑさんの名作は『橋のない川』です。大学生の時『橋のない川』の英訳を読んで、あんまりピンときませんでした。30歳になった時、日本語でもう一度読んでみました。住井すゑさんの優しくて丁寧な言葉選びに惚れ込んでしまいました。これはあまり英訳にはありませんでした。そして1番印象的なのは、重い内容なのに一度もない上からの目線です。読むたびに毎回泣いてしまいます。もし住井すゑさんと会ったらお茶を飲みながら社会問題、差別、現代教育についてたくさん聞いてみたいです。私の勝手な想像ですが、住井すゑさんはとても優しい言葉ですごく奥深い話をしてくれると思います。

　第2位はモーリス・センダックです。小学生の時、学校の図書室で『かいじゅうたちのいるところ』に出会いました。怪獣たちは怖かったけれど、何度もその絵本を借りました。20年後、「絵本講師・養成講座」を受講中にモーリス・センダックの絵本と再会しましたが、残念ながら2012年にモーリス・センダックは旅立たれてしまいました。モーリス・センダックの伝記を読むと彼は「子どもをバカにしてはいけない」ということと「子どもがちょっとトラウマになっても大丈夫」というスタンスを持っていたようです。この2つは私も大事だと思っています。子どもは体が小さいから大人は子どもをバカにしますが、子どもは大人よりいろいろな事を考えていると思いますし、子どもから学ぶ事はたくさんあります。絵本の中で「このページは怖いから飛ばします」という意見を持っている方は多いと思いますが、私は逆に絵本の中の「小さなトラウマ」は大事だと思います。物語はジェットコースターみたいな物なので、怖いところがないと最後の安心できるところの意味がなくなってしまうからです。

　第1位は宮沢賢治です。初めて出会った作品はアニメ版の『銀河鉄道の夜』でした。大人なのに不思議すぎてわかりませんでした。岩手県を旅行した時に宮沢賢治の記念館を偶然見つけ、初めて彼の人生について知りました。いろいろな作品を読みましたが『銀河鉄道の夜』が1番好きです。宮沢賢治についてはたくさんの研究者がいますが、その方々は直接宮沢賢治と会って話していない方が多いから、私は本当の宮沢賢治と話してみたいと強く思うのです。写真で見る限りあまり笑わない真面目なイメージがあると思いますが、シリアスな性格だけではなくてとても優しい、面白い部分もあったのではないかと私は勝手に想像しています。

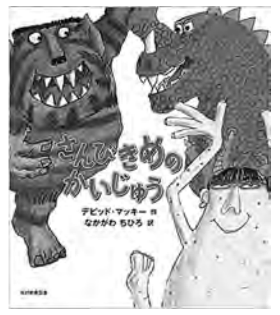
（ジェリー・マーティン）

遠い世界への窓 Ⅷ

物語の中へつれていってくれたり、大切なものに気付かせてくれたり、クスッと笑わせてくれたり……絵本は、いろんな世界への扉になってくれますね。そして、遠い国々に住む人たちの日々の暮らしやワクワクをながめることのできる「窓」にもなってくれるのです。

前田君江
東京大学教養学部非常勤講師
絵本翻訳者

『さんびきめのかいじゅう』



『さんびきめのかいじゅう』（デビッド・マッキー作、なかがわちひろ訳、光村教育図書 2006）

　ヘンテコなかいじゅうたちのお話です。あるところに、海の真ん中にぽかりと浮かぶ小さな島がありました。この島に住んでいるのは、あおいかいじゅうと、あかいかいじゅうです。あかいかいじゅうは、いぼいぼのある真っ赤なちびゴジラみたい。そして、黒と青のトラジマのあおいかいじゅうは、角をなくしたオニみたいです。にひきは、とってもグータラで、それでも、なに不自由なく楽しく暮らしていました。

　ある日のこと、この静かな島に、ボートにのった「きいろいかいじゅう」がやってくるところから、物語は始まります。

　あおいかいじゅうと、あかいかいじゅうが言うには、この「よそもの」の、きいろいかいじゅうの姿は、「へなちょこレモン」みたいで、「おたふくバナナ」で、「マンゴーまんじゅう」で、「くされトウモロコシ」！

　そして、「わたしのくに、じしんでめちゃめちゃ なりました。わたし、すむばしょありません」と言う、きいろいかいじゅうを、まんまと利用することを思いつきます。この島には、大きな石ころがごろごろしていて、じゃまで仕方ありませんでした。「ここにあるいしころを みんなどけてくれ。そしたら とちをわけてやろう」

　さあ、働きもので力持ちのきいろいかいじゅうは、どうしたでしょう。そして、きいろいかいじゅうの働きぶりを見た、あかいかいじゅうと、あおいかいじゅうは？

　この絵本を描いたデビッド・マッキーさんは、みなさんおなじみの『ぞうのエルマー』や『せかいでいちばんつよい国』の作者でもあります。『さんびきめのかいじゅう』をつくるとき、マッキーさんが思い浮かべていたのは、移民や難民をめぐる問題だったそうです（訳者なかがわちひろさんの「あとがき」より）。遠い国から移り住んできた人たち、命からがら逃げてきた人たちに、私たちはどんなメッセージを発しているでしょうか。そして、彼らとどう暮らしているでしょうか。

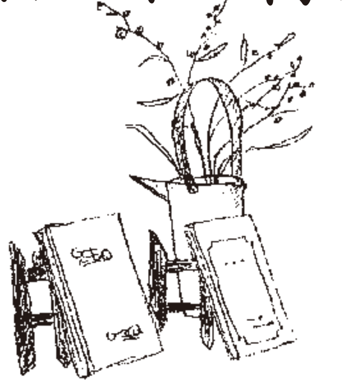
　先日、「難民」の問題を描いた、世界中の（…といっても、やはり欧米のものが中心になってしまいましたが）絵本を集めたワークショップを東京で開催しました。一九七〇年代にインドシナ半島から逃れ、「ボートピープル」としてアメリカやオーストラリアにわたった「ぼく」や「わたし」の家族のおはなし、そして、九〇年代のアフリカの紛争や、近年のシリアや中東から海をわたって逃れた人たちが直面した戦争や死、移り住んだ国での新しい生活や自分のルーツへの思いが描かれた絵本です。

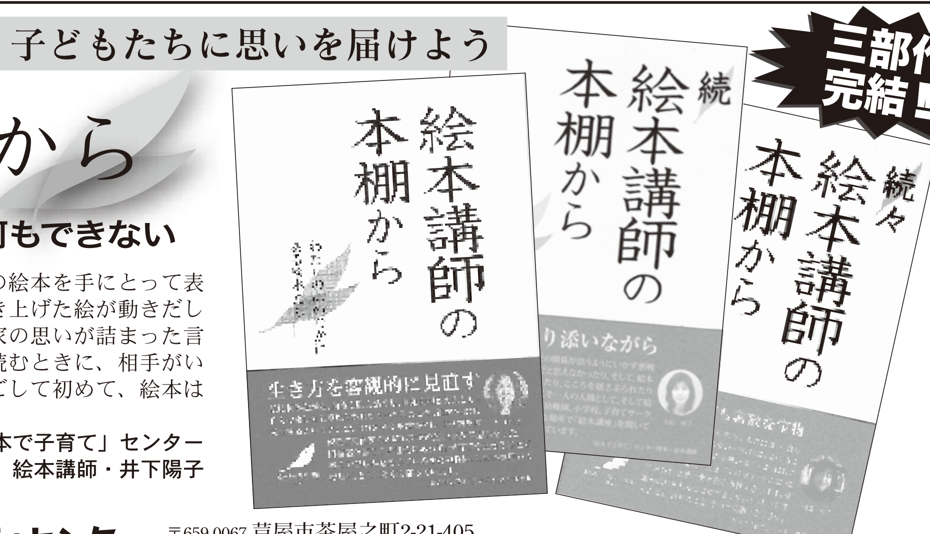
　大きな発見がふたつありました。ひとつは、逃避行の苦しさは描かれるのに、難民となった人たちが移住先で、次世代にまでわたって抱えなければならない問題は描かれないこと。たとえば、差別や、新しい言語を子どもたちはすぐに覚えられるのに大人たちは習得できず、だんだんと親子の対話がむずかしくなってくるといった、ずっと続いていく、暮らしの問題です。もうひとつは、日本で作られる絵本や写真絵本には、各国難民キャンプを取材したものはたくさんあるのに、日本にたどり着いて日本で暮らし続ける難民の人たち（「難民申請者」なども含む）を描いたものがほとんどないことです。わたしたちのごく身近なところに、遠い世界の、そして、世界中の問題がすでに押し寄せてきているのを、きっとみなさんも感じられていると思います。

　さて、きいろいかいじゅうが、ボートに乗せてせっせと海に運んだ石ころは、いつの間にか、小さな素敵な島になりました。「ついでにそのへんも（中略）きれいにしといてよ」と言いつけられ運んだ土、そして、木や草も植えられて、お昼寝するのに気持ちよさそう。あおいかいじゅうとあかいかいじゅうは、きいろいかいじゅうの島に、遊びにいきたくなりました。すると、きいろいかいじゅうは、こたえました。「だけど、わたしもそっちあそびいくですよ。オーケーね！」

　そのあと、さんびきは、どうなったでしょう。絵本では、その先は描かれていません。そして、私たちの島は、どうなっていくのでしょうね。

（まえだ・きみえ）





季節とともに生きよう　絵本とともに生きよう　子どもたちに思いを届けよう

絵本講師の本棚から

絵本って、自分自身では何もできない

　本屋さんで、また図書館で、誰かが本物の絵本を手にとって表紙を開いたときに、初めて画家が全力で描き上げた絵が動きだします。誰かが声に出して読んで、初めて作家の思いが詰まった言葉が歌を歌いだします。その誰かが絵本を読むときに、相手がいて、読み手と聴き手が共に楽しい時間を過ごして初めて、絵本は生き生きと本意の姿を見せるのです。

NPO法人「絵本で子育て」センター
絵本講師・井下陽子

三部作完結！

33人×3（99人）の心の奥に残っている絵本たちを紹介します

定価　各（1400円＋税）

NPO法人「絵本で子育て」センター　〒659-0067 芦屋市茶屋之町2-21-405　TEL 0797-38-7516　FAX 0797-38-7939

土居安子の おすすめ絵本

（大阪国際児童文学振興財団・総括専門員）

（どい・やすこ）

● きみちゃんとふしぎねこ

藤原ヒロコ/作・絵　ひさかたチャイルド

　きみちゃんがアイスを食べていると、関西弁を話す「ふしぎねこ」がやってきて、毛皮を脱いで貸してくれました。きみちゃんはワンピースをふしぎねこに貸しました。きみちゃんはとらねこの案内でねこの道を散歩します。野原でごろりとしたり、塀の上で昼寝をしたりして家に帰り、ねこから人間に戻りました。顔は人間、体はねこのきみちゃんが散歩を楽しむ様子がユーモラスで、いつもと違う視点から町を見ることができます。**（税込価格 1404円）**

● ガラスのなかのくじら

トロイ・ハウエル＆リチャード・ジョーンズ/作　椎名かおる/訳　あすなろ書房

　くじらのウェンズデーは町のまん中にある水槽に住んでいます。ウェンズデーは、時々ジャンプをして、遠くにある「あおいもの」を見て胸をときめかしていました。ある朝、パイパーという女の子がやってきて、「あなたの　ほんとのおうちは、ここじゃないわ」と言いました。ウェンズデーはジャンプをし続けます。町の中でジャンプするくじらの姿や青い海の色が美しい絵本です。**（税込価格 1620円）**

● 漢字はうたう

杉本深由起/詩　吉田尚令/絵　あかね書房

「春って ともだちが すき なぜって 三人の日とかく」から始まる「春」のように、漢字の部首の構成や文字の形を題材にした詩と絵の本。「春」の場合は、女の子とうさぎがピクニックをしているのをキツネがうらやましそうに見ています。「草」「外」「傘」「波」「天」「本」「食」「白」「冬」と季節がめぐり、一年を楽しむことができるようになっています。親しみやすくあたたかい絵が、言葉の持つ物語性を豊かに表現しています。**（税込価格 1404円）**

第15期「絵本講師・養成講座」リポート　2018.06.16

言葉に込められた重みと温かみを感じた一日

報告・星野 めぐみ

　第15期「絵本講師・養成講座」（大阪会場第2編）が2018年6月16日（土）、CIVI研修センター新大阪東に於いて開催されました。梅雨の季節でありながら、爽やかな晴天に恵まれた当日、午前の講演は松居直先生（児童文学家・福音館書店の創業に参画）のDVD講座で始まりました。

　松居先生は『熊のプーさん』のお話が大好きだったそうです。世の中には楽しみも少なくなった戦争中のお話です。松居先生は『熊のプーさん』を読んでいる時は、言葉というものはこんなにもあたたかい！と感じられたそうです。「生活実感のあるゆたかな言葉に包まれ、自分がその世界に入り込んで、そこで生きているような感じがした」とおっしゃっていました。読書というのは言葉の世界にいかに深く入り込んでいくかということ。そして、その言葉に含まれている命というものを、どのくらい自分のなかに取り込んでいくかということのお話でした。

　受講生の皆さんは、途切れることなく語られる松居先生のお話に真剣な眼差しを向けられていました。また語られる先生ご自身の思い出話には会場からも笑い声が溢れました。DVD講座にもかかわらずまるで目の前に松居先生が立たれて講演されているかの様な錯覚さえ感じられる会場の様子でした。

　松居先生が、「私は母から日本語（母語）をもらい、命（言葉）をもらった。子どもはこのことを実感として感じることが大切。それは一生の体験につながっていきます」とお話を結ばれた時には、私自身何度も聞いたお話なのにその一言ひとことの言葉の重みと温かみがまた一段と心にしみました。

　お昼休みをはさんで午後の部はとよたかずひこ先生の講演です。紙芝居に始まりたくさんの作品を読んでくださり、絵本作家になった経緯、作品誕生の秘訣等を交えながら清んだお声で語ってくださるお話に、私たちは幼いころの自分に戻りぐんぐん引き込まれていきました。会場は読んでもらう楽しさも加わり常に笑いの渦でした。

　物語を作る作家というのは、外側にある世界をいかに自分がつかみとるか！「作品は作家の手をはなれると読者のもの」とは、よく言ったもんだ！と言いつつ、『どんどこももんちゃん』への中学生からの感想文を読みあげてくださった時には爆笑の渦でした。心から解放され安心してとよた先生の作品やエピソードのなかに入り込めるというのは何と心地の良いことでしょう。楽しんでもらいたいというとよた先生の思いに私たちが魅了された優しい時間でした。

　その後、大長咲子副理事長からこの養成講座の学び方についての説明が、続いて藤井勇市専任講師からちょっと一言。「子供」と「子ども」の文字表記の違いについての説明をいただきました。今さらながら言葉一つひとつの表記にまでその子どもたちに向かい合う姿勢が写しだされていることに、あらためて心が引き締められました。

　グループワークに先立って武田美保さん（芦屋4期）が『いないいないばあ』を読んでくださいました。一人ひとりに『いないいないばあ』を読んでいただくことは、課題のない本講座のグループワークでの唯一の課題です。読んでもらうこと、またそれぞれ違う読み聞かせを新鮮に感じつつ意見を交換し合うことは普段の私たちにはないことです。それぞれのグループでは、楽し気に賑やかに『いないいないばあ』がこだまし、その後の話し合いに弾みがつきました。

　次回（第3編）は8月、暑さ真っ盛りの季節です。きっと会場内の皆さまの熱気もますます盛り上がってくることでしょう。またお会いできる日が楽しみです。

（ほしの・めぐみ）

わたしの子育て

母になった喜びとダウン症という衝撃

其の一

ダウン症をもつ娘のことば育ち

多本 ゆき枝（絵本講師）

　わが家の一人娘は小学5年生。絵本とぬいぐるみと工作が好きで、将来の夢はお料理屋さんという、明るくおしゃべりな10歳の女の子です。生まれて間もなくダウン症と告知されたときには、今みたいに娘と楽しくおしゃべりできるようになるとは想像できませんでした。

＊　＊　＊

　娘は11年前、私が40歳になって真剣に子どもが欲しい！と試行錯誤している最中に、お腹の中にやってきてくれました。妊娠中は初期に軽いつわりがあったものの、順調でした。胎動を感じるようになった頃、なぜか直感で「この子は女の子だ。名前は〝しほ〟だ」とひらめきました。それからは、お腹の中の赤ちゃんに向かって「しほちゃん」と名前で呼びかけ、毎日たくさん語りかけました。

　臨月近くに散歩していると、お腹の中で赤ちゃんが下がってきて歩きにくくなったことがありました。そこで、お腹に向かって「しほちゃん、下に下がったらお母さん歩きにくいから、上に上がってくれる？」と頼んでみました。すると、スルスルとお腹の中で上に上がってくれるではありませんか。なんて賢くていい子なんだろう、と感心しました。お腹の中で赤ちゃんはお母さんの声を聴いている、と本に書いてあったけれど、本当に聴いているんだ、と嬉しくなりました。

　そして、無事に出産。私は41歳にして母になりました。私の母もこんな気持ちで私を産んでくれたのかと思うと、母への今までとは違った感謝の念が湧き上がってきました。里帰り出産でしたので、両親に「私を産んでくれてありがとう」というメッセージカードと出産記念のペアコーヒーカップを手渡し、改めて感謝の気持ちを伝えました。

　母の声を聴いて順調にお腹の中で育ち、出産予定日の3日前に元気に産声を上げた「しほちゃん」でしたが、生後1ヶ月半でダウン症候群という診断を下されます。本来2本のはずの21番染色体が3本並んでいる写真を見せられては、否定しようがありません。診察室から母子で出ていくとき、看護師さんがついてきて「大丈夫ですか？」と声をかけてくれましたが、そんなに私は可哀想な人なのかと腹立たしく、悲しくなりました。その時の私に必要だったのは同情ではなく、ダウン症児の子育てについての有用な情報だったのに、医師からも看護師からも何ももらえず、下を向いて帰るしかありませんでした。

　高齢出産でしたが、出生前診断の検査は受けませんでした。分かっても治すことができない染色体異常の検査はしない。せっかく授かった命なのだから産まない選択肢はない。一度流産した経験から、もし赤ちゃんに生きる力がなければ途中でサヨナラするだろうし、障害があっても生きる力があれば元気に生まれてきてくれるだろう、と考えたのです。いま、新型出生前診断が簡単に受けられますが、果たして誰のためのものなのか。授かってから、こんな子どもなら引き受けます、こんな子どもなら要りません、というのは、何かが間違っているのではないでしょうか。

　ダウン症の告知を受けて最初に思ったのは、お受験の必要はなくなったな、でした。妊娠中に育児書をたくさん読んで、こんな子育てをしよう、あんなこともさせよう、と膨らませていた夢が一気にしぼみました。でも、落ち込んでいる暇なんかありません。ダウン症について勉強しなければ！

　どう育てたらいい？　私は何をするべき？　母としての責任感が私を前向きにさせました。幸いなことに娘には合併症がなく、元気でした。

　ダウン症関連の書籍を読む中で一番心配になったのは、しゃべらないかもしれないということ。せっかく母となったのに、我が子から「おかあさん」と呼んでもらえないかもしれない……。これは衝撃でした。しばらくはお風呂場で一人になったとき、シャワーを浴びながら涙と共に不安な気持ちを流していました。それでも、ダウン症があっても不幸ではない、と自分に言い聞かせ、娘にはいつも笑顔で向き合うように心がけていました。

（たもと・ゆきえ）

森ゆり子
森ゆり子講演録 改訂版
絵本を読んであげましょう
子どもと共に絵本を楽しみ共に成長する

── 今も昔も変わらない、大切なココロを再確認できる一冊 ──

森ゆり子講演録　改訂版

絵本を読んであげましょう

絵本の内容は覚えていなくても、読んでもらったという心地よい記憶は胸の奥深く残ります

　経済はひとむかし前と比べますと驚くほど成長しました。生活の利便はあらゆる局面に広がりました。物質的なゆたかさは大いに結構です。でもほんとうは、それ以前に考えなければいけない、もっとたいせつなものがあるのではないでしょうか。

　乳幼児期の子どもにとって、最も身近な存在である親とふれ合うことは、これから人生を生きていくうえでとてもたいせつなことなのです。〈中略〉子どもたちのこころを育てるのは、決して〈モノ〉や無機質な〈情報〉ではありません。こころを育てられるのは“こころ”だけなのです。（本文より）

子どもたちは、じっと私たち大人の行動をみつめています

絵本で子育て叢書003
税込価格　1234円

NPO法人「絵本で子育て」センター　〒659-0067 芦屋市茶屋之町2-21-405　TEL 0797-38-7516　FAX 0797-38-7939